地域の宝
但馬牛物語
★30★

# 故郷の誇り持って発信

渡辺　大直

11月は、東京と大阪で但馬牛の話をする機会に恵まれた。

東京は、県の観光振興施策「あいたい兵庫キャンペーン2017」の一環として、首都圏からの観光客誘致宣伝キャラバンで、マスコミの人たちに但馬牛の歴史や神戸ビーフの話をしに行った。今年は、「ひょうご食体験の旅」がテーマで、神戸ビーフやカニなど県内のおいしい食材とコラボした誘致戦略として声がかかったようだ。

但馬牛、神戸ビーフを知ってもらうチャンスでもあり、勇躍…と言いたいところだが、どう伝えたらいいか少々不安があった。

東京に着いて、会が始まるまで時間があり、天気も良かったので、久々に浅草に行ってみた。仲見世を歩いていると、小学生らしい女の子に声をかけられた。振り返ると、彼女は手作りのパンフレットで、町のシンボル富神山、ホタルやバイカモが育つ豊かな自然、大之越古墳や困った人を助けた〝おたすけ石〟伝説が伝わる西山形を紹介してくれた。

故郷を大切に思う気持ちを感じた阪神橘友会の総会

彼女は西山形小学校の6年生で、修学旅行で東京に来て、町を訪れる人を増やすための活動をしているという。明るく、明快に故郷を語る彼女の話を聞いて、これだなと思い、心軽く会場に行くことができた。

大阪は、浜坂高等学校同窓会阪神橘友会だった。

さすが美方郡の高校だけあって、昔、家で牛を飼っていたという人や友達が牛を飼っているという方もあり、但馬牛の歴史話には懐かしそうな、若い後継者が頑張っている話には嬉しそうな表情で聞いてくれる人もあった。また同級生も来てくれ、2次会からわざわざ合流してくれた幼馴染もいた。講演だけでなく、懇親会も含めて但馬牛を介したふるさと情報を発信できたかなァと思う一方、故郷を離れた人たちの故郷を大切に思う気持ちも感じた。

私自身も、但馬牛に故郷に連れ帰ってもらった一人だが、牧場公園には、但馬牛飼育農家を目指して地域おこし協力隊員として都会からきて頑張る若者もいる。

そんなことから、但馬牛を通じて地域の元気につながるような気がしてきた。

今ちょうど但馬牛博物館をリニューアルする工事を行っていて、展示内容の検討や作成を行っているところだ。博物館で発信すべき情報や伝え方について、いろんな人から大いに刺激を受けた1カ月だった。

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牛博物館「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます